

(3) 結論と問題点

のり網には全く採苗できなかつた。海底に沈下設置したことによる、擦れ等がその原因かも知れない。

藻場での採苗は幼芽の生育数において移植採苗法に劣っている。その理由については不明である。

移植採苗法は幼芽の生育数さらに作業の簡便さの面から実用化の可能性はより大きいように思われる。基質に生育した幼芽の減耗が今回の試験においてもみられる。

魚類や底生動物による食害、漂砂等による擦れ或いは被覆、さらに防止網に付着する浮泥や微細藻（シオグサの一種）の生育することによる目づまり（光量の減少）等が幼芽の生育制限要因となっていると思われる。

今回用いた防止網は耐波性或いは安定性に問題がある。

建築用コンクリートブロック（ $40 \times 20 \times 20 \text{ cm}$ ）は粗面や凹所が少なく、採苗基質としては適当ではないので改良する必要がある。

中層にのり網を張り込む採苗方法については藻場での採苗が良好でなかつた理由の追究の一環として、検討の必要があると思われる。

3) 食害試験

藻場を造成するに当たって、とくに藻場の形成初期においては食害に関する何らかの対策が必要であるとされている。

ここでは、藻場で大きく生長したホンダワラ類（主としてsp-1ツクシモク?）をホンダワラ類が全く生育してない漁場へ設置することによって、標題に関する観察を行った。

昭和50年8月26日、宜野座村字大久保地先でホンダワラ類を採取し、その日の中に恩納村字屋嘉田地先の図-10に示す実験漁場に設置した。

基質への結縛方法は図版VI-1に示すように、およそ1kgの藻を建築用コンクリートブロック（ $40 \times 20 \times 20 \text{ cm}$ ）に $\phi 3 \text{ mm}$ のロープで結縛した。ブロック数は18ヶ、その中6ヶは4mm目のモジ網張りの防止網の中においた。また、自然の基質ごと藻場から移送したのも防止網の外においた。

結果は次のとおりである。

移植8日後の9月3日には防止網の施されていないツクシモク?は葉部はほとんどなくなっていて、茎や根幹部を残すか或いはコンクリートブロックの基質だけになっている。

一方同時点における防止網の中の藻は落葉がみられず、また基質から離れているものも少ない（図版VI）。

以上の結果から、防止網外の藻の減耗は食害によるものと考えられる。

基質やその周辺にシラヒゲウニ（以下単にウニとする）の蝸集があり、しかもホンダワラを食していることが確認された（図版VI-5、6）。しかし生息数はおよそ 1 m^2 当り2個体以下で、多く